

2019年3月19日付 建設通信新聞第12面（最終面）

試験傾向知り無駄なく学習

前回までは新設された電気通信工事施工管理技術検定について主に紹介したが、今回は施工管理技術検定全体の傾向を分析していく。

■敵を知り己を知れば百戦危うからず
試験傾向を知ることが、合格するための第一歩だ。国家試験である施工管理技術検定は、土木・管工事・電気工事・建築などの科目で実施されるが、どの科目についても一次試験といえる学科試験（四肢択一のマークシート方式）と、2

資格について知ろう④

建設現場を支える「施工管理技士」

次試験の実地試験（記述式）があり、両方に合格することで施工管理技士に合格となる。そして新設された電気通信工事も同様である。

学科試験は、4つある選択肢の中から正しいもの、あるいは誤っているものを1つ選ぶ『四肢択一』式（マークシート式）の問題である。2次試験となる実地試験のような記述式の問題と異なり、時間配分に注意すれば、あとは正解肢を選択することに専念できるので、受験しやすい出題形式といえる。

学科試験の合格率はほぼ横ばいを保っているが、出題内容は難化傾向にあり決して容易な試験ではないと認識すべきである。しかし、学科試験は正答率60%以上で合格となり『上位何%』といった相対試験ではないため、合格点を得点できれば全員合格も可能な試験である。努力が反映されやすい試験であるため、難易度は上がっているものの勉強法を誤らなければ十分合格できる試験であろう。

■ポイントは試験傾向をつかむこと

なぜ、試験傾向を知る必要があるのだろうか。その理由は2つある。1つめの理由は試験傾向を分析することにより、無駄なく学習を進めることができるということ。もう1つは出題範囲が幅広いため、この範囲を漫然とくまなく勉強していたのでは、いくら時間があっても足りないからである。試験傾向をつかむことにより習得しなければならない重要な論

点を絞り込み、効率良く学習を進めることができるのである。施工管理技術検定は勉強のポイントさえ外さなければ決して合格できない試験ではない。

■優先して学習すべきは『施工管理法』
学科試験の出題区分には配点が最も高い『施工管理法』という分野がある（表参照）。にもかかわらず、実務経験でなじみのある専門分野に気をとられ、普段あまり馴染みのない『施工管理法』の対

比重の大きい分野に絞る

1級土木施工管理技士試験学科試験
出題数と各出題比率（平成30年度例）

出題区分	出題数	解答数(A)	解答数に対する比率(A/B)
土木一般	15問	12問	18.4%
専門土木	34問	10問	15.3%
法規	12問	8問	12.3%
共通工学	4問	4問	6.1%
施工管理法	31問	31問	47.6%
計	出題96問	解答65問(B)	100.0%

※学科試験は出題区分により解答数が異なる。

策を怠った結果、不合格になるケースは少なくない。1級土木施工管理技術検定という、専門分野については34問中、わかる問題を10問解答すればよく、全範囲を学習することは受験対策上、効率的ではない。施工管理技術検定は、工事現場を指揮する最高指導者としての資質を問う

試験である。合格後は適正に建設工事を管理し、技術上の指導・監督職務も行うため、必然的に可否の基準は『施工管理法』に相当な比重が置かれることになる。つまり、短期間で合格を勝ち取るためには施工管理法の攻略が最優先となる。

■短期合格にはあえて満点を目指さない
学習を進める上で陥りやすいことは、満点を目指したり、参考書を網羅的に理解しようとしてしまうことであるが、上述のとおり確実に効率よく合格する上では非常に無駄である。また、このような学習方法は、非効率なだけでなく、合格から遠ざかる可能性がある。

試験勉強に専念できるような学習環境が整っていれば、このような学習方法でもよいかもしれない。しかし、受験生の多くは学習時間に制限がある社会人であり、網羅しようとする試験当日までに行うべき学習範囲まで到達することができず、消化不良で試験に臨むことになり、結果を残せないことが多い。試験に合格することと、参考書の内容をすべて理解することはまったく異なり、ここを勘違いすると合格は難しい。試験は試験と割り切り、『合格点をとるにはどうすべきか』のみを考えることが重要である。